

〈思想〉をめぐる物語としての「山形」

志賀直哉文学の持つ可能性について

亀井千明

0 はじめに

「山形」(昭和二年一月、『中央公論』第四二年第一号)は、自伝的内容を持ち、明治三十九年の志賀が二十三歳の頃の出来事を描いた作品である。このことは発表時において既に確認されており、「稿中に出てくる伯父志賀直方氏」や、「その伯父さんに伴れられて志賀氏が行った寺といふのは山形在白岩ドウコウ寺で、その住職が三浦了寛といふ高僧である」と、それぞれの実在する人物を解き明かされていることが新聞記事等から確認できる。ところで、昭和十三年六月「改造」に発表された自作解説「続創作余談」では、「明治四十年の夏の事で、事実を只ありのままに書いたもの」と作品について説明されてい

るのだが、「山形」初出時より十一年後に書かれたこの自作解説は間違いを孕んでいる。志賀の書いた書簡などから明治三十九年における出来事であることは、現在確認されている事柄である³ことを付け加えておく。

「山形」の先行研究であるが、今日において殆ど見当たらないような状況にあるといっても過言ではない。その数少ない先行研究には、ほぼ同様の見方が示されているといつてよい。例えば赤木俊(『私小説作家としての志賀直哉』、『志賀直哉研究』、河出書房刊、昭和十九・六)が「プラトニック・ラヴ」「過去」「山形」では、青春の激情が、中年の落ち着いた心境をとほして、冷静に回顧され、批判されてゐる」と志賀にとっては回顧調の作品であるとしたり、中村光夫(『志賀直哉論』、『文芸春秋

刊、昭和二十九）は、足尾鉾毒事件を背景として父親と争った頃の志賀を知ることの出来る作品等と述べたりと、志賀の伝記的事実を知り得ることの出来る作品として扱われている傾向にある。

このように、今日の志賀文学研究において「山形」は特に目立ってはおらず、作者の実体験を描いた〈私小説〉以上の扱いを受けてはいない状況にあると言³ってよい。しかしそれは、今日私たちが目にすることの出来る「山形」テキストに対する反応ではあるまいか。というのは、「山形」には、初出から戦後の昭和二十二年十月芸芸春秋社より刊行された「濁った頭」に収録されるまで、長らく伏字を施された箇所が存在していたのである。それは次に挙げる、作中の「私」と叔父の会話部分に当たる箇所である。

「お父さんとの衝突もいゝが……」叔父が云ひ出した。

「少くも、事、〇〇に関するやうな事を云ふのはよせよ」

「それは此方も云ひたくないが、考へ方の相違がそんな事で一番簡単に明瞭するから、つひ出るんだ」

ちなみに、この伏字がされた箇所には「皇室」の二文字が入

る。「山形」が発表された当時の出版物法案（柴田義彦「著作権新聞紙出版予約出版法規」〔常盤書房、昭和8・5〕所収）によると、次のような項目が含まれていることが確認できる。

出版物ニハ左ノ事項ヲ掲載スルコトヲ得ス

一 皇室の尊嚴ヲ冒瀆スル事項

二 国体ヲ変革セントスル事項

このような皇室への否定的な発言を禁止するような出版規制は、この頃始まったというわけではないだろう。しかしながら、「山形」は発表当時において、社会風紀攪乱の思想要素を持っていた作品として受け止められ、伏字を施されたということになる。それはつまり、今日では志賀の個人的な出来事を語った作品としか受け止められていないものの、初出時から戦後にかけては、何らかの思想性を問われるような内容を持っていた作品として扱われていたといえる。このような事実は、〈私小説〉としての側面ばかり受け取られがちな「山形」を考え直す契機とはならないだろうか。

本稿ではこのことを諸端として、志賀文学の新たな可能性を探るべく〈私小説〉・「山形」とは違う新たな作品の側面を提

示していくことを目的としたい。

1

まず初出形「山形」への反応を確認するために、同時代評を見てみる。それらは志賀自体への批判と相まって、作品への過剰とも取れる否定観が附されているようである。ただその否定点は一様に扱うことはできない。

まず、森本跋夫の「独善隠遁の態度―志賀直哉氏への手紙―」(『新潮』昭和2・4)は、当時の志賀に対する文壇内での安定した高評価を認めながらも、森本自身は志賀の文学自体に「十分の好意」を持ってはいないと言いつつ、多くの文壇人に「第一流作家の地位」を与えられ、「永久不変の芸術的本質に根ざした完成品と称え」、「神品の献辞」を捧げられている作家であるものの、「時代は最早貴下の芸術の如き社会的関心と理想のない、自己中心の独善的作品に敬意を払はない」と、「せせこましい写実小説に終わっている」点や、「身辺の日常の出来事を題材」とする作品内容へ疑問を呈している。つまり、時代が志賀の作品を、これまでのように肯定的に見なさないことを指摘しているのであるが、このような森本の論調の中で、「山形」

は次のように取り上げられている。

私は貴下の近作「山形」を読んで、貴下も社会的意識に全然無関心な人ではないことを想見した。昔の「正義派」といふ作品にはどんなことが描かれてあつたか忘れてしまつたけれども、危険思想とか正義とかいふ文字が折々創作に用ゐられるにもかかはらず、貴下の創作態度は、十年一日の如く変らない。常に隠遁的である。作品の中では、主人公の思想や感情が彼の周囲と衝突する、そのいきさつを細々と描くばかりで、いつまでもきまり切つた私小説である。

このように述べる森本には、「作品に社会的理想(人生に対する積極的な目的)を要求しない作家評論家に取つては、文章が第一義的価値であるのに不思議はない。と言ひただけだ」といったような、作品内容で作家の思想を窺うとする考えが「下地としてあった。しかし、「社会的関心と理想のない」、「時代」に合わない非社会的作品(私小説)を書く作家という論調で志賀のことを見なそうとする森本にとって、「山形」は意外な作品として位置付けていることが分かる。結局は、「隠遁的」で「いきさつを細々と描くばかり」の「きまり切つた私小説」であると断定してはいるが、「山形」は「社会的意識」の

見える作品として、一旦は認められているとは言えるのではないだろうか。

一方、このような森本の論調とはまた違う形で「山形」を取り上げているのは昭和三年十月『中央公論』に発表された正宗白鳥の「志賀直哉論」である。白鳥はこの当時、「専ら『日本文学全集』（註・正式名は改造社刊の『現代日本文学全集』）の配本に応じて、作家論を見せてゐる」¹¹たらしいが、改造社における志賀の『志賀直哉集』もまた昭和三年七月一日に刊行されている。

白鳥は志賀の「温室育ちのお坊ちゃん」らしいところが、「時として作品を安っぽくしている」としているが、一方で広津和郎や芥川龍之介等が畏怖し賛美する志賀の作品を持つ「芸術味」は認めている。しかし「芸術味」よりも、寧ろ時代が共鳴したのは志賀の「人道主義」「非軍国主義」といった思想感情の方ではないかとし、「十一月三日午後之事」（『新潮』大正7・11）を例として挙げているのであるが、作中に頷かれた軍国主義非難については、同時代評において和辻哲郎は賞賛したものの、白鳥としては「何ぞ容易ならんや」と感慨を洩らしている¹²。反面「その思想を實際界に当嵌めて卓見視するのは幼稚である」とも弁護する論調でもって「山形」については、次の

ように触れている。

当時の青年批評家が「卓見」視した志賀氏思想は「山形」といふ短篇や「和解」といふ長篇や、その他の小品の中にもをりく微見えてゐるが、しかし、十年足らずの間に時代の思潮は變つて、今日の青年読者や青年批評家には志賀氏の社会観などは微温的なものとして冷笑されるやうになつた。もつと荒っぽく根本的でなければならぬと云はれるやうになつた。しかし、それは志賀氏の作品が価値を失つた証拠にはならないので、芸術家たる氏の芸術を味は、
 ないで、附屬の思想を見るから起つたことなのだ。

この「冷笑」する読者の例として「青年読者」や「青年批評家」とは言えないものの、昭和二年一月十四日付『読売新聞』の「文芸」欄で、徳田秋声が「昭和先頭の文芸（十）」において次のように述べている。

志賀直哉氏の「山形」といふ作品は、ちよつと古くさひ匂ひのある作品である。古くさひから悪いといふ訳ではないが、かう言つた時代思想のやうなものを取扱ふと、古くさくなり勝なのである。

つまり、和辻が述べる「青年読者」等以外の、秋声のような大家となつた作家にも、「山形」に描かれた出来事は時代がかつ

たものとして受け入れられていたといえる。

白鳥の同時代評に話を戻すと、先の森本とはまた異なる「山形」への位置づけを行なっている。森本は自身と時代の双方の考え方から、志賀の作品に見える「思想」は通用しないものとし、「山形」における「社会性」も然りと考え、時代にそぐわないものと見なしたが、白鳥は森本の批評文に表れているような、志賀の作品における思想性に対する時代遅れとの反応に対し、そういった側面があることを認めつつも、作品を思想という側面だけを見ることを拒否し、志賀の作品の芸術性は時代を超えたものがあるのではないかといった、新たな評価点を提示しつつ反駁しているといえる。

これら二氏の批評について切り口は異なるものの、いずれも志賀及び作品の社会性・思想性という側面に着目し、それらが時代に寄り添っていないものであることを指摘しているといえる。しかしながら、この時期の批評において、これほど作家の《思想》の問題に焦点が当てられるのは何故なのだろうか。

考えられる原因として、「山形」が発表された当時の文壇状況がある。先に挙げた白鳥の「志賀直哉論」には続きがあって、それは以下のような内容である。

今日のプロレタリア文学だつて、一知半解の思想や理窟

だけで、芸術としての価値を有つてゐなければ、明日は亡んでしまふのである。「十一月三日午後の事」にしても、『小僧の神様』にしても、一幅の人生図として玩味してゐると、今日見ても、昨日見た時に劣らないほどの味ひが味はゝれるので、十年や二十年で廃物になる訳がない。

白鳥の論調をまとめると、この「十一月三日午後の事」「小僧の神様」などといった作品と共に「山形」もまた並べられるのだろうが、白鳥が言わんとするところには、プロレタリア文学への警告があり、思想ばかりで志賀の作品のような芸術性を失なってしまうと、「亡んでしまふ」と指摘しているのである。つまり志賀の作品は、プロレタリア文学という時代の産物へ対抗できる芸術性を持ったものとして、位置付けられているといえる。このように、文壇においてプロレタリア文学が広がりを見せようとしている中で、勝本清一郎(「志賀直哉論」)、「都新聞」昭和三・十・一、二)が志賀に対して「こと程左様に志賀氏の世界は狭く、その鍛錬はその狭い範囲内だけでの意味しかない」といった批判がされたのもこの頃であった。昭和四年以降の志賀の沈黙も、こういった文壇の時流から外れたためと解釈されている。反面、白鳥による「芸術性」への評価は、この後昭和四年の小林秀雄や昭和七年の井上良雄等の志賀論に見え

るプロレタリア文学へ対抗できる文学・存在としての志賀文学及び志賀評価に通じていくものがある。つまり、「山形」評は、その後の文壇における志賀への評価も占うものでもあったといえる。

このように、伏字を施され思想問題を持ちえていた「山形」は、文壇内でプロレタリア文学が次第に勃興していく時期に一度発表された作品であることから、社会に関わってくる〈思想〉性の側面で作品評価がなされた。しかし、その評価の内実としては、白鳥の「古い」といった見方や、結局「私小説」に過ぎないといった森本の〈思想〉の描き方に関する見解等、「山形」に対する否定観は、作品内容自体から発生したものであると考えられる。よって、こういった〈思想〉に対する否定的な同時代評を受けながら、次節ではテキスト内部を分析していく事とする。

2

「山形」は冒頭でも述べたように明治三十九年時の出来事を、大正十五年という執筆時に想起して書いた作品である。そして足尾鉍毒事件に関わる父親との争いが主題となっているといえ

るが、この事件自体は明治期に起された問題で、そういった前時代の事件を扱っている事から、先の白鳥の言うような「古い」といった見方が出てくるのかもしれない。

つまりは、そういった過去の出来事に関する記憶を、作者である志賀が再構成するという形を取っている。「山形」は、「その夏」に「私」という志賀と見られる登場人物とその父親とが「つまらぬ事」で衝突した時を起点として、物語時間が進行している。衝突してから一週間後、父親の買った宮城県鉍山を、一緒に見に行くことを誘われることになる。衝突を気にする「私」は、父親が誘ってきたことを訝しがるものの、喜びは隠せない。それから「夕方」、「翌朝」、「翌日」と、行った先での具体的な行動が時間に沿って詳細に語られていくのであるが、その合間では、更に過去時の記憶を呼び起こされていることも確認出来る。例えば汽車の座席について、父親が上等で、「私」が中等であったことに対して、

その五六年前、青森から上等と一緒に帰って来た経験があるの、此事は何故か気軽には考へられなかつた。召使ひかなぞのやうにも思へ、愉快でなかつた。

このように、過去の出来事を語りながら、それよりも更に過去時の記憶もまた物語の中に織り込まれていることが確認でき

る。一見問題ないように見受けられる記憶の語り方には、一方で不整合も生じてきている。それは記憶を語る際、記憶を再構成する者の意図が反映したものと考えられる。つまり、過去の記憶を、自らが意図するところへと話を持っていく際に生じた問題である。それは、「私」に対し父親が山形へ行くことを進める物語の後半部分から、物語に不整合な点が目立ってくる。次に挙げる箇所からである。

東京を出て既に六日になる。私達はこれで来た目的を果たしたわけで、翌日は又もと来た道を引き返す事と思つてゐると、その晩父は不図想ひついたやうに、こんな事を云つた。

「お前は帰り、山形へ寄つたら、どうだ」

ここまでは、過去の記憶を時間軸に沿って、語り手も客観的に過去を語ってきた。しかしここで、「私達はこれで来た目的を果たしたわけで」とわざわざ言い為していることから窺えるように、これから別の「目的」があったことを語っていくための、複線のような語り方へと変化していることが確認できる。つまり、語り方はここから変化を遂げていく。

それは、「その夏」の旅行について、真の「目的」があったことを語っていく為の、語りになっていくといえようか。先ん

じて述べてしまうと、その語り方は、「目的」へ向けての誘導的な語りへとなっている。

山形に着き叔父に對面した際、叔父はあたかも来ることを予期していたかのように「来たか、疲れたらう」と「私」に言葉を掛ける。それまで父親が何故旅行に誘つたのかを漠然と疑問視していた「私」は、その叔父の言葉で總てを悟ることとなる。

叔父は父から手紙を受け取つたのだ。叔父は自分の師匠であるMさんによく話して貰はう。然し露骨にさう云へば順吉は恐らく承知しまい。何気なく此方へ寄越してくれないか。こんな返事をしたのだと私は察した。それで何気なく私に鉾山行きを誘つたのである。そして何気なく山形行きを勧め、私は何気なく此処へ来て了つたのだ。さう私は思つた。

私は叔父にその事を確めては見なかつたが、それに違ひないと信じ、さう自分が扱はれた事を快からず思つた。

つまり「私」は、總てが「何気なく」行なわれたことで、その總てが山形へと「私」を向かわすことへ繋がっていたことを悟る。ところが、ここでは「Mさんによく話して貰はう」といったことが出てくるわけだが、これは後々読めばMさんも登場し、意味が通じてくる。しかしこの段階でMさんの名が出てくるこ

とには不自然さがある。つまり、山形に到着した時点での「私」には、その後待ち受けていることは到底想像がつかない。よって、Mさんがここで登場し、その後のMさんの行為まで「私」が想像しているのは不自然が伴う。もちろん、過去の記憶を語る志賀自身は知っている事実ではある。しかし、それまで過去時に沿った形で語りを続けてきたことを考慮するならば、この語り方はおかしなものとなってくるのである。

こういった語り手である作者が、真の目的という想定する結末に向けて誘導的な語りを行なっていく様子は、後半ではよく見受けられることとなる。例えば、「最初はそんな話をしてゐたが、Mさんは段々話を目的に近づけようとした。」といった一文もまた、「私」の思想を戒めようという、山形での真の目的があった上での言い方といえる。そしてこのような作者の誘導的な語りの行き過ぎた例として、次のようなものもある。

翌朝父に別れ十六七里の路を一人、車で行った。その六年前奥羽線のない頃私は此辺を一度旅した事がある。大石田から二日かけ最上川を下り、酒田から象潟を通り本庄まで十八里の路を車で行った。今度はそれに次ぐ車での大旅行だった。

これは、〈その夏〉という過去時より過去の記憶が入れ込ま

れている箇所だが、前述したような、過去時の記憶の中のものではなく、あくまで語っている作者が想起した記憶となっていることが分かる。やはりこういった語り方の変化も、後半以降のものである。

しかし、結局この誘導的な語りが明らかにしていったのは、山形行きが父親の意図であったという極めて個人的な事情ではなかったか。そうすると、父親が旅へと誘ったことに對し「不思議な気がした」とか「わざわざ旅に連出す気持が私には分らなかった」といった、疑心暗鬼ともいえる「私」の心情が前半部分に用意されたことは、後半の真の「目的」へと繋がっていくための伏線になっていたと考えられる。そういった特に物語の後半部分に見える誘導的な記憶の語り方の中で、同時代評の、特に森本が「私小説」だと反応した「山形」における〈思想〉の問題はどうなっていくのか。更に作品を読み進めていくこととする。

3

Mさんの「学生の間は学生らしく、学校の方だけを勉強して、大学でもいい成績で卒業するのが第一の急務だよ」等といった

忠告の後に、「私」は叔父と話し合う機会を持つ。そこで叔父と押し問答のような形となる。「お父さんとの衝突もいいが」、「皇室に関するやうな事を云ふのはよせよ」と戒める叔父に対して、「私」は「それは此方云ひたくないが、考へ方の相違がそんな事で一番簡単に明瞭するから、つい出るんだ」と反論する。そういった激論の果てに、二人が行き着いたのは、「一緒に声をあげ、泣き出」すことだった。それは泣くことによつて、二人の争論に答えが出されるのではなく、不明瞭になったといえる。

更に、「私」の感慨として以下のように続けられる。それは叔父に帰ることを促された後のことで、

私は叔父に対し何の不愉快も感じてはゐなかつた。私は私自身の考を所謂危険思想とは考へなかつたが、このままに若し一方に押し進んだ場合、自分は誰よりも先づ、此叔父に屹度殺されるだらうと思つた。私はそれに殆ど恐怖は感じなかつた。恐怖を感じるといふ事は許されなかつた。然し孤独な淋しい気持になつた。

この「私」の感慨には、おかしさがあることが認められる。つまり、「恐怖を感じる事は許されな」という一文について、その理由は前後を読む限り、窺い知れない。これは叔父に対し

恐怖を感じる事を許されないことだが、ここには叔父と一体化する「私」の感情があることが確認できるのではないか。つまり叔父の側へと、自身の感情を寄り添わせる事によつて、そのものと一体となり、個人的な感情さえも自山にならないといった事態に陥つているといえる。こういった状況へとなつてしまつたのは何故だろうか。考へるに、「私」は争論の末に、叔父と「一緒に声をあげ、泣き出」してしまふ。つまりこの時叔父と対立していた「私」の心情が、叔父と一体化してしまつた瞬間を表す。

前節で示したような誘導的な語りが招いた結末とは、個人的な感情へと落ち付き、論争の焦点となつていた「私」の《思想》がうやむやとなつてしまつた状態である。ところで、大西巨人(『学習院と渡良瀬川鉞毒事件』『巨人批評集』)所収「秀山社、昭和五十」は足尾鉞毒事件に関する志賀の一連の行動に対して、「山形」のテクスト分析を通じて、「志賀は、彼自身を父との対立を通して渡良瀬川鉞毒事件(の本質・根源・元凶)と対決または対立せしめることがなかつたのであつて、かえつて渡良瀬川鉞毒事件を単なる偶然的・便宜的媒介として彼の覚醒せる(「上流階級」的または「中流上層階級」的)自我・少年から青年への過渡期における自己主張それ自体を父(の有産

者的自我)に對置したのであった。」と述べている。「山形」の結末時に見える、正にうやむやとなつてしまつた論争は、大西氏の意見と同様な事態を、如実に表しているとも窺える。大西氏はこういつた志賀にとっての結末を、あくまで否定的には解釈していない。その解釈はやはり〈私小説〉的な解釈ではないか。つまり志賀の父子問題に繋げるといった、「山形」の伝記的側面を強く意識した解釈であるといえる。しかし、そういった見方を離れて、「山形」の作品内容はそれ以上のことも示してくれていることを言えるのではないだろうか。それは、Mさんとの話し合いの最中に、

私は父と衝突する場合、父の尊敬してゐるものとの相違を云ふのが一番手ッ取り早く、結局其所へ議論を落として了ふ。

こんな事も云つた。私の通つてゐた学校では大名家族の子弟が半数以上を占めてゐたからだ。かういふ私の考へ方は私の実感で、社会主義とは何の関係もなかつたが、父はそれをさう解して居たのだ。

これらは語り手に変化が訪れ始めた後半部におけるものであるが、ここで語られていることがMさんと話している過去時の心情といえるかどうかは判断が付き難い。むしろ、大正十五年

の記憶を語る執筆時のものであると受け取ることも出来る。ここでは、「私」の考え方が「社会主義」とは何の関係も無いこと、父親と反対のことを言う際に、偶然危険思想めいたものに似た言い返しになつてしまふということが説明されている。この文章には大西氏が指摘するような、志賀の足尾鉍毒事件に関する対応の未熟さや〈思想〉の欠如以前の問題が潜んでいると思われる。つまり志賀は〈思想〉の有無自体を問題としておらず、むしろ自らが発した発言が、他者によって「危険思想」と判断され、そういったレッテルを貼られてしまふような事態を作品中で暴き出しているといえる。伏字を施され、プロレタリア文学勃興という時代の最中で発表されたことから、〈思想〉への着目がなされてきた「山形」であつたが、作品自体は、そういった外部からの決め付けについて、あたかも覆してしまふような要素を持っていたといえる。

4 おわりに

「山形」という作品自体が、作品に纏わる〈思想〉に関する言説状況について相対化してしまうような要素を持っていたのではないかということも明らかにしてきたわけだが、足尾鉍毒

事件への対応に限らず、志賀には「政治的無知」(本多秋五)といった言葉に表れているような、似通ったレッテルが貼られている現状にある。そういった志賀に対する作家観は、高口智史氏のような志賀と社会との係わりを作品から見出そうとする一連の研究を要請したとも受け取れる。

しかしながら、作家の〈思想〉や〈政治〉の有無や是非を問うよりも、まずはそれらの内実を問うべきではなかったか。今回取り上げた「山形」のような志賀のテクストは、私たちのレッテルを貼るような行為について逆に問い直されてしまうような内容を持っていたのである。それは現在〈私小説〉としてしか見られていなかった「山形」自体が持つ、新たな作品の可能性ということが出来るだろう。

註

(1) いずれも、昭和二年三月二十五日付の『読売新聞』の「閑談」欄。

(2) 志賀の手紙で、明治三十九年八月二十二日付の鳴子東湯から浩への手紙には次のようにある。

正直な事を申せば、出立の時などは、これから無言の行でも始めるやうな心持致し一日も早く、山形へ行きたいや

うな心持なりしが、今は戻つて、父上の御供をして、仙台の方を廻り帰りたい程の心地に相成り候

(3) 現在の私小説研究において、私小説の概念とは論じる人の数ほどあると言われ、概念規定の方向へとは向かっていない。そういった研究状況を受けて、本稿では私小説という語を使う場合、括弧で括った〈私小説〉という語を使用することとする。それは「山形」や多くの志賀作品に附されている、その概念内実が定かではないまま漠然と「私小説である」との批評言説等によるレッテルのことを指している。

(4) 戸川貞雄「文芸時評」(『新潮』昭和三・十二)に、「文芸時評」で男を上げたのは、中央公論に於ける正宗白鳥氏だつたと思ふが、近来では正宗氏は、専ら「日本文学全集」の配本に依じて、作家論を見せている。」とある。

(5) 和辻の「十一月三日午後の事」批評は、「電車のみなかで」(『読売新聞』大正八・一・九)にある。「満足といへば、新潮に出た志賀氏の「十一月三日午後の事」は、至極満足したころもちを僕に起させました。読んでゐて不満な箇所が一箇所も出て来ないのです。」と評価し、「主人公はたゞ「変な気がした」り、顔をそむけたり、涙ぐんだり、興奮して「何しろ明らか過ぎる事だ」と思つたりするだけです。そのくせそこにはこの明

らか過ぎる害悪が——軍国主義や戦争や国家的利己主義や無知な臣制と屈従や、およそ目前の人類を苦しめてゐる馬鹿々々しい誤謬の一切が、赤裸にして横たへてあるのです。」と和辻によって志賀の〈思想〉が読み起しが行なわれている。

(6) 小林秀雄は「志賀直哉」(『思想』、昭和四・十二)の書き出しで、「私はこの小論を書かせるものは此の作者に対する私の敬愛だが、又、騒然と粉飾した今日新時代宣伝者等に対する私の嫉妬でもある。」と述べたり、井上良雄は「芥川龍之介と志賀直哉」(『磁場』、昭和七・三)において、小林の志賀論を受けながら、「志賀氏の最高度の個人主義は、社会主義とどの様な抵触をも示さない」と左翼陣営に否定的に見られていた志賀文学の特色を肯定している。

(7) 足尾銅山の問題が明治・大正・昭和と、時代の経過の中で「社会問題」として人々に認識されていくプロセスについては、田村紀雄氏の「序章 足尾鉍毒問題の成立」(『田中正造をめぐる言論思想 足尾鉍毒問題の情報化プロセス』所収、社会評論社、平成十・八)に詳しい。

(8) 「灰色の月」——志賀直哉の〈戦後〉——(『近代文学研究』平成五・四)、「清兵衛と瓢箪」——〈冬の時代〉の構造——(『日本文学』、平成九・七)等。

* 本稿における「山形」本文及び同時代評等の資料に関する引用は、総て初出に拠っている。旧字は新字に改めた。尚、本文・資料中における傍線は総て私に附した。